

# 筒井康隆入門

佐々木敦

# 筒井康隆、 推薦—!

わし以上に  
わしのことを  
知っている  
人がいる。  
困ったこと  
である。

すべての **ツツイスト** と、これから  
**ツツイスト** になるあなたのための、**最高の入門書。**



筒井康隆入門

佐々木敦

星海社





わしが存在している理由はね、愛するためだよ。わたしが創ったものすべてを愛するためだよ。当然だろう。すべてはわしが創ったんだ。これを愛さずにいられるもんかね

『モナドの領域』

筒井康隆は、現代日本文学が生んだ最重要にして最強（最狂？）の怪物的作家です。一九六〇年の小説家デビュー以来、半世紀以上にわたって、紛うかたなき第一線の作家として活躍してきました。それほど熱心に本を読まないひとでも、彼の作品のどれか一編くらいは読んだことがあるのではないかと思えます。戦後に登場した作家のなかで、もっとも広く名を知られた存在のひとりと言ってよいでしょう。

日本SF第一世代であり、中間小説誌の最盛期を支えた流行作家であり、長く読まれ続ける名作を著したジュブナイル作家であり、小説のジャンルとスタイルの飽くなき改革者であり、卓抜なエッセイストであり、愛と閃ひらめきに満ちた書評家でもある筒井康隆には、数多の熱心極まる読者たち、ツイストとも呼ばれるマニアックなファンがいます。長年の愛読者を公言する作家や評論家、出版関係者、メディア人も枚挙に遑いとまがありません。彼の読者層は、実に幅広く、そして数世代に及んでいます。ある時あるタイミングでたまたま

読んでしまった筒井康隆の作品に衝撃を受け、一挙に筒井中毒に罹かってしまふ者も少なくありません。

しかしそれだけに、デビュー時からリアルタイムでずっと読んできた筋金入りのベテラン（にして高齢の）筒井中毒者を除くと、読み始めの時期によって、読者それぞれの筒井康隆のイメージに多少ともばらつきが生じることになり、とにかく作品数が膨大、かつ重要作が尋常でなく多いこともあって、筒井康隆という巨人の作品世界をトータルに把握することが次第にむつかしくなってきたことも事実なのではないかと思うのです。

かくいう筆者は一九六四年生まれ、最初に読んだ筒井作品が何だったのか記憶が明確ではありませんが、おそらくショートショート集『にぎやかな未来』（一九六八年）だったのではないかと思えます。小学校五、六年くらいのことです。多くの人が辿るルートだと思えますが、その頃の子どもたちに絶大な人気を得ていた星新一のショートショートを讀んだ流れで筒井康隆のことも知ったのです。その時点で『にぎやかな未来』の刊行から数年が過ぎていました。SFというジャンルに本格的に耽溺たんできするようになったのはもう少し後、七〇年代半ばの中学生になってからで、最初に好きになった作家が筒井康隆でした。当時文庫ですでに何冊も出ていた既発書を夢中で次々と讀んだものです。正直に言えば、中学生

にはなんだかよくわからない作品、いろいろな意味で刺激が強過ぎる作品もありましたが。ともあれ書店に並んでいる「筒井康隆」の本をどんどん読破していったのです。それはめくるめく体験でした。

その時点では、筒井康隆も作家になってまだ十数年しか経っていません。それでも遡って読もうとしたらすでに数十冊（！）もあったのです。そしてそれ以降も筒井康隆は続々と本を出していきました。となると、筆者よりも年下のひとは、とりわけ最近になって筒井康隆と出会った読者は、必読の名作とされる題名を幾つか知ってはいても、かつての筆者のように刊行されている全作品をとにかくひたすら読んでいくことが、なかなか困難になっってしまったことは否めないと思うのです。なにしろこの作家は、大変なワーカホリック（働き者）なのですから。

そこで、この『筒井康隆入門』を書いてみようと思いついたのでした。

本書は、筒井康隆の作品を、デビュー作から最新作に至るまで、小説を中心として、ほぼ発表順に読んでいくことで、この稀代の大作家の肖像を、出来るだけ総体的に描き出すことを目的としています。これから筒井康隆を読みたいと思っているひと、すでに何冊か読んではあるが次にどれに進めばよいのか迷っているひとに向けて、そしてほとんど



の作品を読んでいる強者読者の方にも、あらためてこの例外的大作家の汲めども尽きせぬ魅力の秘密を、筆者と一緒に考えてみていただけるように、本書は書かれています。それがゆえの「入門」であるわけです。

とはいえ、繰り返しになりますが筒井康隆の作品数はとにかく膨大です。その全てに満遍なく触れることなど到底出来ません。何よりも本書は、一冊のコンパクトな「入門」であることを必須としています。それゆえにどうしても、言及するべき作品の選別が必要になってきます。長編にかんしては、ほぼ漏れなく紹介していますが、中短編となると、時代ごとに、折々の機会に編まれた短編集の中から、筆者の独断と偏見でセレクトを行なっています。もちろん傑作、名作として評価が定まっている作品はなるべく取り上げていますが、それ以外はもっぱら筆者の個人的な感覚で採っています。むしろこのあたりに、筆者なりの「筒井康隆像」というものが表れているかもしれません。

しかし当然、筋金入りの筒井ファンの中には「どうして「○○」に触れてないんだ」とか「なぜ「○○」でなく「××」なんだ」などと思われる方も出てくるだろうと思います。そこは見解の相違ということで、どうかご容赦願えればと思います。各作品への評価、評言も同様です。つまりこれは「筒井康隆入門」であると同時に、いわば筆者にとっての「わ

たしの筒井康隆」でもあります。でもあらゆるこうした試みは、どうしたってそうなるってしまわないでしょうか？

それからもう一点、あらかじめの方針を述べておきたいと思います。

筒井康隆は、一九三四年九月二十四日、大阪府大阪市北堀江に生まれました。父親は大阪市立自然史博物館の初代館長も務めた動物学者の筒井嘉隆よしたか。康隆は長男で、正隆まさたか、俊隆としか、之隆ゆきたかの三人の弟がいます。女きょうだいはいません。昭和一桁世代の最後（昭和九年生まれ）であり、第二次世界大戦終戦時にはちょうど十歳でした。同志社大学文学部に入學し、美学美術史学科に進みました。卒業論文は「心的自動法を主とするシユール・リアリズムにおける創作心理の精神分析的批判」。学生時代から演劇にのめり込み、一時はプロを目指していました。俳優としての活動は社会に出ても続きます。一九五七年の大学卒業後、店舗施行やディスプレイ・デザインの乃村工藝社に就職しますが、当時は海の向こうからやってきたばかりのまったく新しい小説ジャンルだったSFと出会い、父嘉隆と三人の弟と共に、昔も今も極めて珍しい血の繋がった家族によるSF同人誌「NULL」を一九六〇年に創刊、第一章で述べるように、それが商業作家としてのデビューへと繋がります。一九六一年、四年間務めた乃村工藝社を退職して独立、自らのデザイン事務所「ヌル・ス

タジオ」を大阪市北区に開設し、そこはやがて日本SF第一世代のたまり場としても機能してゆくことになります……

……などといった伝記的な記述は、本書においては必要最低限しか行なっていない。個々の作品の背景の説明にあつた方がよいと思われる場合のみ適宜<sup>てきぎ</sup>触れていくに留めます。あくまでも「作品」に沿って筒井康隆の世界を総覧していくことにします。この意味で、本書はいわゆる「伝記」や「評伝」とは違うものです。そのような書物は、そもそも筆者の手には余りますし、いずれ別のもっと適任の著者によって、精確で詳細な伝記が書かれるだろうと思います。

本書で筆者がしたいのは、筒井康隆によって書かれた綺羅星<sup>きらぼし</sup>のような作品群を、はじまりから現在まで、ある意味で愚直に黙々と、順番に読んでいくことです。そうすること、これまでもとは僅か<sup>わず</sup>でも異なった筒井康隆の新たなイメージを発見することが出来るのではないか、それが筆者の野心なのです。

いや、これだけでは、さすがにちょっと曖昧ですね。では本論に入る前に、筆者の「筒井康隆の肖像」の基本的なポイントを、先に述べておきたいと思います。それは、

## 筒井康隆は二人いる。

というものです。そしてこの「二人」は、まるで真逆の性格に生まれついた双生児のように、ほとんど正反対と言ってもいいような属性を持っています。

どういうことでしょうか？

詳しくは、実際の作品を読んでいきながら、おいおい明らかにしてゆくことにしますが、端的に言えば、こういうことです。

筒井康隆は、天才にして秀才である。

筒井康隆は、実験小説家、前衛作家にして小説の職人、テクニシャンである。

筒井康隆は、ジャンル越境者にしてジャンルの守護者である。

筒井康隆は、タブー破壊者にしてモラリストである。

筒井康隆は、変人にして常識人である。

更にはここに、右とはやや違う観点による定義ですが、「筒井康隆は、作者にして読者で

ある」を付け加えてもいいかもしれません。しかし、この話は最後の最後まで取っておくことにしましょう。

「筒井康隆は二人いる」というのは、このように、一見すると二項対立の両極であるかに思われるような二種類の属性を、ひとりの作家が併せ持っている、筒井康隆という一個の個体の内に、相矛盾する二要素が重ね合わされている、という意味です。少なくとも筆者の目には、この小説家の姿が、そのように見えています。こんな視座に則って、これから筒井康隆を読んでいこうと思います。

もちろん、筆者は自分の意見を殊更に強弁するつもりはありません。いま述べた主張は、この不世出の作家の全体像を描き出すための、筆者なりのひとつの足掛かりに過ぎません。実際には、一編一編の作品に向かい合う作業の底の方で、うっすらと流れているような感じになると思います。何と言っても、本書の最大の、いやむしろ唯一と言っていい目標は、いまこの文章を読んでいるあなたに、筒井康隆をもっと読みたくさせることなのですから。それでは、始めましょう。

# 筒井康隆 入門

目次

はじめに 4

第一章 SFの時代 デビュー作「お助け」(1960年)から『脱走と追跡のサンバ』(1971年)へ 15

第二章 黒い笑いの時代  
ブラックユーモア 『家族八景』(1972年)から『大いなる助走』(1979年)へ 63

第三章 超虚構の時代 『虚人たち』(1981年)から『文学部唯野教授』(1990年)へ 111

第四章 炎上の時代 断筆宣言(1993年)から『巨船ベラス・レトラス』(2007年)へ 163

第五章 GODの時代 『ダンシング・ヴァニティ』(2008年)から『モノダの領域』(2015年)へ 195

あとがき 263

参考文献 266







第一章

# SFの時代

デビュー作「お助け」（1960年）から『脱走と追跡のサンバ』（1971年）へ

## 小説家・筒井康隆の誕生

筒井康隆のデビュー作は、雑誌「宝石」の一九六〇年八月号に掲載されたショートショート「お助け」であると、一般的には認知されています。これまで何度か編まれた年譜や書誌にもそのように記されていますし、ウィキペディアなどのインターネット上の記述でもそうなっています。筒井康隆本人も、それを認める発言をしています。

しかし、これは必ずしも正確ではありません。というのも、もともと「お助け」という小説は、同人誌「NULL」に掲載された作品でした。

「NULL」は、筒井康隆が父・嘉隆、正隆、俊隆、之隆の三人の弟たちと共に創刊した、おそらく世界的にも非常に珍しい、血の繋がった家族によるSF同人誌です（メンバー全員が家族なので「同人誌」という呼称も正しくないのかもしれませんが）。一九六〇年六月に発刊された「NULL」第一号に、筒井康隆は「お助け」「模倣空間」「タイム・マシン」という三編のショートショートを発表しています。「NULL」は地方のミニコミでありながら、そのユニークな成り立ちもあって、テレビ番組でも取り上げられるなどかなり注目され（著名な動物学者だった父親嘉隆の影響もあったことでしょう）、推理小説界の重鎮であり、当時「宝石」の編集長の任にあった江戸川乱歩えどがわらんぽの目に留まり、乱歩によって「お助け」が同誌に転載されることに

なったのでした。

こういった経緯ですから、確かに商業誌に載った第一作という意味では「お助け」が筒井康隆のデビュー作ということになりますが、作家としての出発点という観点から見れば、「お助け」に加えて「模倣空間」「タイム・マシン」という計三作品を同時に「NULL」に載せたのが実際のスタートだったと言いうことが出来るでしょう。

この時代はまだ、小説の商業雑誌は多くはありませんでした。そのため、小説家を志すひとは最初はおっぱら同人誌で活動し、そこで発表した作品が認められて商業誌へのデビューを果たす、という形でキャリアを積んでいく作家がたくさんいたのです。筒井康隆と同じく日本SF第一世代に属する星新一ほししんいちも、最初期には同人誌に作品を発表しています（星もSF同人誌「宇宙塵」掲載のショートショートが「玉石」に転載されて商業誌デビューしました）。純文学の世界でも、同人誌に発表された作品が芥川賞の受賞作になることもありました。

つまり、今よりも同人誌の存在感がはるかに高かった時代なのです。文壇関係者は、めばしい新人を発掘するために有力な同人誌を常にチェックしていました。現在も文芸同人誌は多数存在していますが、小説家としての登竜門は、ある時期以降、圧倒的に新人賞が中心となっており、同人誌からデビューして人気作家になったケースは近年では西村賢太にしむらけんた

など数えるほどしかいません。ちなみに文芸同人誌出身の大家には故・中上健次なかがみけんじがいま  
す(「文芸首都」)。筒井康隆はのちに、この「文芸同人誌」の世界を『大いなる助走』で描くこ  
とになります。

ところで、ここにはもうひとつ重要なポイントがあります。それはもちろん「SF」と  
いうジャンルの問題です。

筒井一家が「NULL」を発刊する前年の一九五九年十二月に、日本初のSF商業誌「S  
Fマガジン」が早川書房から創刊されました。サイエンス・フィクション＝SFは当時、  
海の向こうからやってきたばかりの、まったく新しい、未知の小説ジャンルでした。「SF  
マガジン」創刊号を読んで大いに刺激された筒井康隆は、  
家族を誘って「SF」を専門とする同人誌を立ち上げた、  
それが「NULL」だったというわけです。

筒井康隆のみならず、「SFマガジン」の創刊は、大きな  
インパクトを与えました。筒井康隆、星新一とともに「日  
本SF三羽鴉さんばがらす」  
と言われた小松左京こまつさきようも、これをきっかけに  
SF作家を志しました。「SFマガジン」の新人小説賞「S



「SFマガジン 1960年2月号(創刊号)」(早川書房、1959)

Fコンテスト」に応募して小松がデビューを果たすのは、この少し後の出来事になります。さて、自ら創刊した「NULL」に書いたショートショートが筒井康隆という作家が誕生した瞬間だったとして、彼が作家になることを決意したのはいつのことなのでしょう。実は後年、本人によって、かなりはっきりとした日時が述べられています。一九七七年に雑誌「奇想天外」に掲載された「筒井康隆に25の質問」という記事の中で、「いつ頃から作家になろうと意識しましたか？」という質問に対して、このように答えています。

一九六〇年二月十二日午後十時三十二分。阪急電車梅田―千里山間の車内で。

(筒井康隆に25の質問)

かなり時間が経ってからの回答ですから、本当にこの通りだったのか、電車の中で何があったのか、あるいは筒井康隆ならでは、あえて異常に細かいことを述べてみせるというギミックに過ぎないのか、その真偽は分かりません。

しかし、少なくともこのタイミングが、まさに「SFマガジン」と「NULL」の創刊のあいだに位置していることは事実です。

だから、やはりこの頃に、筒井康隆は「NULL」の創刊を思い立ち、それを足がかりとして、SFを、小説を書いていこうと決意したと想像することは許されるでしょう。

### ショートショートの名手として

それでは、筒井康隆のデビュー作である「お助け」と「模倣空間」「タイム・マシン」は、どんな作品だったのでしょうか。

「お助け」は、宇宙航行技術の研究所に勤める主人公が、スペース・ナヴィゲーター（宇宙航空士）としての訓練の一環として加速実験を受けたことをきっかけに、周囲と自分の時間感覚に大幅なズレが生じてゆき、遂には残酷なラストに辿り着く、という物語です。ラストの一言がなんとも痛切で、江戸川乱歩が「寶石」に採ったのも首肯<sup>うなず</sup>ける秀作です。「模倣空間」は、二人のサキユロス星人が「ある太陽系の第四惑星」で拾ってきた「第三惑星」の「二足獣」の忘れ物（実は〇〇）を携えての帰路、対象そっくりに成り切ってしまう「模倣空間」に立ち寄ったことから珍現象が起ります。「タ



『にぎやかな未来』(角川文庫、2016)  
デビュー作「お助け」ほか、断筆宣言の契機となった「無人警察」などを収録したショートショート集。

「タイム・マシン」は、世界各国の架空のニュース記事の継ぎ接ぎはによつて「タイム・マシン」の開発実験にかんする各国の駆け引きが描かれていきますが、なんともペシミスティックな幕切れが待っています。背景にあるのはもちろん、冷戦下にあった米国とソ連による核開発競争です。三編とも完成度は高く、しかも小説としてのタイプが異なっていて、デビュー時から筒井康隆が才能と技術に恵まれていたことを鮮やかに示しています。

「NULL」は、最初は家族だけで作っていたにもかかわらず、きわめて順調に、コンスタントに刊行されていきました。第一号は一九六〇年六月、第二号が十月、第三号が一九六一年の二月という、一年に三冊ほどのハイペースで出ています。しかもこの時期、筒井康隆はデザイナーとしても働いていました。「NULL」という雑誌名はデザイン事務所「ナル・スタジオ」の名前も兼ねたものです。筒井康隆は職業デザイナーとしての仕事をこなしつつ、初期の「NULL」には毎号、数編の作品を発表していきます。

これらの小説のほとんどは、いわゆるショートショートでした。ショートショートの日本におけるパイオニアは、もちろん星新一です。星は当時すでに複数の雑誌に書いており、一九六〇年にはショートショート六編によつて直木賞の候補にも挙げられています（受賞は逃がしましたが）。ショートショートという小説スタイルは、この頃に一般的になったといえ

ます。日本SF第一世代にとって、ショートショートという発表形態は非常に重要なものでした。紙幅を取らず、すぐに読み終えることが出来て、しかも読者に大きなインパクトを与えることが可能なアイデアストーリーという形式は、SFという未だ認知されていない若いジャンルの作家たちが、一般的な商業雑誌に書いていくうえで、非常に便利であったのではないかと思います。

日本SF第一世代は、小松左京にせよ、まゆむらた眉村卓にせよ、ショートショートをたくさん書いていますが、星新一に次いでショートショートの名手といつてよいのは、やはり筒井康隆だったのではないかと思います。しかし筒井のショートショートは星とはかなりタイプが違っていて、その多くが奇想と呼んでもいいような突飛なアイデアによって書かれており、最後にかなり皮肉な、のちの作風を予告するブラックなオチがあるものが多いです。ラストの一言が実に感慨深い「帰郷」(NULL二号)や、ショートショートの中でも特に短い、原稿用紙半枚しかない傑作「到着」(NULL三号)、やはりかなり短い「マリコちゃん」(NULL四号)、秀抜な偽怪談「きつね」(NULL五号)など、筒井康隆の創作力は初動から爆発しています。

また、ショートショート以外にも、星新一も参加していた、しばの柴野拓美たくみ(別名…こづみ小隅黎)の編



集による日本最初のSF同人誌「宇宙塵」に発表された「環状線」(一九六二年)や、「NUL」四号掲載の「二元論の家」(同)など長めの短編も並行して執筆しています。「環状線」は題名通り、国鉄(今のJR)の環状線をめぐっていると自分が増殖してゆくというアイデアストーリーで、コアなSF同人誌であった「宇宙塵」という発表媒体を意識してか数式が出てきたりもしますが、それ以上に、のちの一連の作品に繋がる「自己の分裂Ⅱ複数化」の最初のヴァージョンとして読むことが出来ます。「二元論の家」は大学の卒論でも扱ったフロイトの精神分析理論を援用した野心作で、やはり結末が大変強烈です。

同人誌活動だけではありません。「お助け」の「宝石」掲載がきっかけとなり、筒井康隆には程なく商業誌からも依頼が来るようになります。一九六一年秋には「廃墟」という作品を「宝石」に発表しています。これは商業誌が初出となった最初期の作品でした。おそらく遠未来の廃墟を舞台に、ふた組のカップルである四人の行状が物語られていくのですが、ラストで四人全員が男性であったことが明かされます。彼らは遭遇した女性を自分たちと同じ生き物だと思わなかったという救いのない落ちがついており、プリミティブではありませんが、いわゆるジェンダーSFの走りといってもいい佳作です。

一九六二年に入ると月刊誌「科学朝日」から依頼があり、やはりショートショートを、

ほぼ連載に近いかたちでコンスタントに発表していくようになります。筒井康隆は商業デビューをしてからさほど時を置かずして、幾つもの媒体に旺盛おうせいに小説を書くようになっていました。デビュー直後から作品数はかなり多いです。次から次へとアイデアが湧いて来る、といった感じだったのだらうと思われます。そして驚くべきことに、質と量を伴ったこの生産力は、その後もずっと続いていくのです。

### 冷戦の背後で

一九六二年の二月、筒井康隆は「科学朝日」に「怪物たちの夜」という作品を発表しています。これは初期のショートショートの中でも、今から読むととりわけ衝撃的な内容の作品で、水爆実験によって奇形化した人間たちを描いています。デビュー作のひとつ「タイム・マシン」もそうでしたが、一九六〇年代に入ると米ソの冷戦はますます緊張感を増し（キューバ危機は一九六二年十月のことです）、マスコミにおいても核戦争の危機が盛んに取り沙汰されていました。

「怪物たちの夜」が発表されたのと同じ年に、三島由紀夫みしまゆきおも『美しい星』という唯一のSF長編において、水爆実験を主題のひとつに据えています。この小説は発表後、半世紀以

上を経て、二〇一七年に吉田大八監督よしだ だいはちによって映画化されましたが、この映画には筒井康隆が推薦コメントを寄せています。

一九六〇年代とは、日本も、世界も、多くの意味で激動の時代だったと言えます。まさにこのディケイド十年の始まりと共に作家としての活動を開始した筒井康隆は、表面的にはそれとはすぐにわからないような作品も含めて、その都度の時事的な出来事や、世間を揺るがしたさまざまな事件に敏感に反応した作品を、SFという形式を用いて書いていくこととなります。とりわけ前期の筒井作品に文明批判、社会風刺的な要素が強いのは明らかですが、しかし筒井康隆の一筋縄でいかないところは、それが単に警鐘けいしょう的なスタンスに終始することもなければ、かといってただ何もかもをナンセンスかつ無責任に笑い嗤わらいのめしてしまおうとするのでもない、という点です。彼のやっていることはもつと複雑です。このことは、おいおいわかってくるだろうと思います。

商業雑誌に書くようになってからも、「NULL」は継続的に刊行されており、筒井康隆も毎号のように数作を発表しています。その中には「やぶれかぶれのオロ氏」(七号)や「睡魔のいる夏」(八号)、「下の世界」(九号)、「いじめないで」(十号)など初期の代表作が含まれています。同誌は一九六四年に第十一号をもって終刊になりましたが、約十年後の一九七三

年に「ネオ・ヌル」として復活することになります。

ところで、筒井康隆に「N U L L」の創刊を思い立たせた「SFマガジン」へのデビューはいつのことだったのでしょうか。それは同誌の一九六三年臨時増刊号に載った「ブルドッグ」によってでした。「那智」という名前の飼犬のブルドッグの思念が突然「私」のなかに流れ込んでくるというアイデアの作品で、非常にブラックなオチがついています。翌一九六四年以降、筒井康隆は「SFマガジン」へも次々と力作短編を発表していき、それは後で触れる一九六八年末の「覆面座談会事件」まで続きます。

### メタフィクション作家としての萌芽

ところで、初期の筒井康隆の作品をあらためてまとめて読んでみると、たとえば同じ日本SF第一世代の小松左京や光瀬龍みっせりゅうなどが取り組んでいたような、SFというジャンルの王道に位置する作品を書こうというよりも、SF的な題材や設定、SFならではのアイデアを使いながら、何かSFとは違うタイプの小説を書こうとしているような印象を強く受けます。筒井康隆がSFというジャンルに対して深い愛情を抱いていることはもちろんなのですが、どこかで「SF」というものの自体を客観視しているような姿勢が感じられるの

です。ある意味で筒井康隆はそもそも最初から、SFというジャンルに独特な距離感を持つていた、SFという特異な小説形式を一步引いたメタな視点から見ているように思われるのです。それは批評的な視線と呼んでもいいかもしれません。ちよつと極端な言い方をすれば、筒井康隆のSFは、最初から「SF」のパロディやパステイシューでもあるかのように筆者には思えるのです。

一九七〇年代の終わりに『きょじん虚人たち』という作品を皮切りとして、筒井康隆はメタフィクションという小説の様態を、自身もその言葉を使いながら意識していくことになりました。しかし考えようによっては、最初から彼の小説はメタだったと言えるのではないかと思えます。小説のジャンル性に対して、あるいは小説というフィクションのあり方自体に対して、批評的な、醒さめた、メタな視点が、もともと存在していたように感じられるのです。

これは筒井康隆が役者をやっていたことが関係していると筆者には思えます。演劇とは、本質的に、原理的に、メタな視線、メタな次元を含む芸術です。舞台上で展開される物語や出来事を、観客とは別の意味で、どこかで常に距離を置いて冷静に眺めているような意識が、今まさに演じている役者自身にもある。これと似た意味で、筒井康隆の小説には、書かれつつある小説へのメタな意識が、当の小説を書いている彼自身の内にあらかじめイ

ンストールされているような印象が、さまざまレベルで見取れるように思われるのです。

### 「疑似イベント」的な想像力

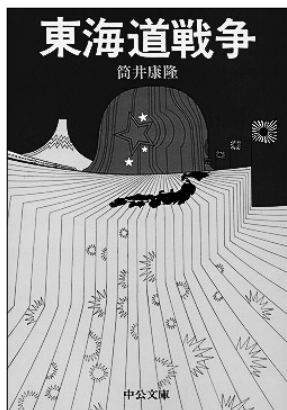
一九六〇年代前半、筒井康隆は続々と小説を発表していきます。それらはショートショートではなくても、まだそれほど長いものではなく、アイデアストーリー的な傾向の強い、多くの場合、切れ味の鋭いオチで物語が完結するものです。アイデアマンにしてテクニシャンという筒井康隆の才気は初期から遺憾なく発揮されています。しかし次第に結末に収束していくだけではない小説のあり方を、筒井康隆は模索していくようになります。

その最初の成果と言つていい意欲作が、第一作品集のタイトルにもなった「東海道戦争」(SFマガジン)一九六五年七月号)です。これはテレビ台本を模した幾つかの章から成る中編で、何が原因なのか皆目不明のまま、東京と大阪が戦争を始めるというストーリーです。ちなみに東海道新幹線の開業は前年の一九六四年十月のことでした。その後、筒井康隆は幾つもの作品で「戦争」を描いていきますが、その最初の試みという意味でも重要な作品です。

日本の東西の二大都市が、理由もきっかけもよくわからないまま、いつのまにか全面戦

争に突入しているという設定は、もちろん米ソ冷戦の暗喩です。しかしそれをこのような日本人にとって身近なスケールに落とし込み、ドタバタ騒ぎの中に或る強烈なりアリティを注入してみせたのが、この作品のユニークなところだと思います。このようなアイデアを、筒井康隆は「疑似イベント」と名付けました（『東海道戦争』のもととのタイトルも「疑似イベント」だったそうです）。現実そっくりの世界に疑似的なイベント⇨出来事を挿入してみせたら、果たして現実がどのように変容するのかという、現在の言葉でいうならば一種のシミュレーション小説のことを「疑似イベント」と呼んだわけです。筒井康隆はこの手法に手応えを感じたようで、その後も「疑似イベントもの」を積極的に手掛けてゆきます。

詳しくは第四章で述べますが、先に少しだけ触れておくと、この「東海道戦争」と同時期に「科学朝日」にショートショート「無人警察」が掲載されています。この作品が一九九三年になって高校の国語教科書に転載され、作中の記述にかんじて日本てんかん協会からの抗議を受けたことがきっかけで、筒井康隆の九〇年代の大きな事件である、いわゆる「断筆騒動」が起ることになります。初出から



『東海道戦争』（中公文庫、1994）

表題作ほか、「いじめないで」「お紺昇天」「やぶれかぶれのオロ氏」などを収録した短編集。

三十年近くが経ってからの出来事でした。むしろこの時点では、未来にそのようなことが起きるとは筒井康隆も想像だにしていなかったことでしょう。

話を戻すと、この時期になると筒井康隆は、「SFマガジン」掲載の「東海道戦争」が「疑似イベントもの」であったように、SF色の強い作品をあまり書いていません。これは同じ時期に「SFマガジン」で超ハードSF『果しなき流れの果に』を連載していた小松左京と比較すると対照的です。筒井康隆の場合、たとえハードSF的な道具立てを使っても、小説家として目指しているものが小松とはかなり違っていたと言っていると思います。しかし、そんな中で一九六四年に同人誌「宇宙塵」に半年間にわたって連載された「幻想の未来」（題名はフロイトの書名からだと思われます）は、人類がほぼ滅亡した星を舞台に、思うさまイマジネーションを押し広げた極めてSF度の濃い作品で、これにSFへの偏愛が集中的に注がれていたからこそ、他の小説では相対的にSF色が薄くなったと見ることも出来るかもしれません。



『幻想の未来』（角川文庫、2017）  
「幻想の未来」「模倣空間」「アフリカの血」などを収録した短編集。解説は山下洋輔。



## プロの作家へ

一九六五年十月、筒井康隆は初短編集『東海道戦争』を上梓<sup>じょうし</sup>します。表題作の他、電子頭脳ジョブとのどんどんエスカレートするSM劇「いじめないで」、知能を持った話すクルマとの純愛譚「お紺昇天」、突然変異を遂げた盲目の猫たちの悲話「群猫」、火星連合総裁オロ氏の記者会見が目も当てられない展開に陥る「やぶれかぶれのオロ氏」、総花学会が支援する恍惚党の悪行を描いた「墮地獄仏法」など、いずれ劣らぬ問題作揃いの過激なデビュー作品集です。

そして『東海道戦争』の二ヶ月後、筒井康隆の初めての書き下ろし長編『48億の妄想』が刊行されました。これは「東海道戦争」で先鞭をつけた「疑似イベント」を全面的に展開した作品です。ここで描かれるのは、テレビが何よりも絶大な力を持った世界です。この長編の発表前年の一九六四年に東京オリンピックが開催され、テレビを所有する家庭が飛躍的に増えたことが物語の背景にあります。この小説では、ひとびとは皆、テレビに映ることを過剰に意識して生きています。ありとあら



『筒井康隆コレクション I 48億の妄想』（出版芸術社、2014）  
日下三蔵編による選集シリーズ第1巻。表題作ほか、「幻想の未来」  
「SF教室」「お助け」「模倣空間」「タイム・マシン」などを収録。

ゆる人間の営み、政治の世界や人の生死も完全にショー化され、いわばウケるかウケないかだけで全てが決定されてしまう。筒井康隆は多数の登場人物とエピソードを巧みに操りながら、事態を軽薄なまま刻々と深刻化させてゆき、そして第二部に入って、おもむろに「疑似イベント」を仕掛けます。それはやはり「戦争」という「疑似イベント」です。

『48億の妄想』は、五十年以上前に書かれたことを思うと、確かに細部はさすがに古くなっていますが、全体としての世界観は、驚くほどに現在の社会を予見しています。とりわけインターネット以後、SNS以後の、FacebookやInstagramに自撮りやリア充自慢を嬉々としてアップして互いに「いいね!」を付け合う人々のメンタリティや、ネットドラマやフェイクニュース問題なども、この長編は先取りしています。しかしこう考えてみると、メディアやテクノロジーはアップデートされても、人間の愚かさというものは基本的に変わらないのかもしれませんが。当時、筒井康隆はまだ三十歳を超えたばかり、この時点で彼は日本社会に対して、透徹した視線を持っていました。

「NULL」の終刊もあって、この頃からはSF的な作品は「SFマガジン」に発表されていきます。その内の傑作のひとつが「マグロマル」(一九六六年二月号)です。星間連盟の会議にやってきた「私」は、会議の議題である「マグロマル」という言葉の意味がわからない。

それがラビドラ語、すなわち全星間共通語で星間協定にかんする政治的専用語であることは知っているのだが、何のことなのか全然わからない。さて、どうするか、という短編で、のちに全面開花する独特な言語感覚と、筒井作品を貫通する重要なテーマのひとつとなる「ディスコミュニケーション」の萌芽ほうがが感じられる重要な作品です。

そして、一九六六年から六七七年にかけて、筒井康隆は「SFマガジン」に『48億の妄想』に続く第二長編『馬の首風雲録』を連載しています。スペースオペラ風の冒険SFですが、「あとがき」で作者自身が書いているように、ここでもまたSFという様式を取りつつも、作品を書くにあたって参照されているのは田河水泡たがわすいほうの『のらくろ』やベルトルト・ブレヒトの戯曲、岡本喜八おかもとぎの映画やヘミングウェイはち、大岡昇平おおおかしょうへいなど、古今東西の「戦争」を描いたさまざまな先行作品であり、これらに対するパロディ的な要素も含めて、いうなれば筒井康隆の「戦争論」をスペースオペラ仕立てで小説化したものとなっています。しかし同時に、たとえそうした読み方をしなくても、『馬の首風雲録』は活劇SFとして非常に優れており、無類に面白い小説になっています。



『馬の首風雲録』(扶桑社文庫、2009)

暗黒星雲「馬の首」で勃発する大宇宙戦争を描いたスペースオペラ風SF長編。

## 人気作家への道を駆け上る

六〇年代の後半になると、中間小説誌を中心に新たな雑誌媒体からの依頼が急激に増え、筒井康隆は人気作家、流行作家への階段を一気に駆け上っていきます。本格的に量産体制（これ以前だって作品数は多いですが）に入ったと言つていいでしょう。

一九六七年に第二短編集『ベトナム観光公社』が出ます。「SFマガジン」に発表された表題作は、最初の直木賞候補作になりました。この時点で筒井康隆は直木賞候補に挙げられる存在になっていたわけです。しかし受賞はかなわず、追って触れていくように、その後二度、計三度、直木賞の候補になりながら結局、栄冠を射止めることは出来ませんでした。この落選体験が、七〇年代末の長編『大いなる助走』に繋がっていくとされているのですが、それはまた第二章で述べます。

「ベトナム観光公社」は、タイトルからも分かるように、当時既に泥沼の様相を呈していたベトナム戦争を背景にしています。しかし舞台は未来で、「おれ」はフィアンセと新



『日本 SF 傑作選1 筒井康隆』（ハヤカワ文庫 JA、2017）  
「東海道戦争」「ベトナム観光公社」「パブリック創世記」など、  
『SF マガジン』掲載作を中心に初期傑作 25 編を収録した短編集。

婚旅行に火星に行くつもりが、ひよんなことから中央アフリカを経由して南ベトナムに行つてしまいます。そこでは戦争が観光行事として続いていた、という話で、舞台がベトナムに移つてからの後半は『48億の妄想』や「東海道戦争」と同様の「疑似イベント」的な発想で書かれています。

直木賞の選考委員で好意的な選評を書いているのは大佛次郎（「面白いと思ひ推したが、味方してくれる者がなかった」と柴田錬三郎（「才能のある作家であることは、充分みとめられる」）でした。しかし選考委員の大半が選評でも全く触れていないなど、好き嫌いがはっきりと分かれていたことが窺えます。なお、この回の直木賞を受賞したのは三好徹と野坂昭如でした。

短編集『ベトナム観光公社』には、その他に、先に触れた「マグロマル」、これまたその後さまざまな形で繰り返し描かれてゆくスカトロロジーを扱った「最高級有機質肥料」、ボデイ・スナッチャーもののSFの形式を借りてサラリーマン社会を風刺した「トラブル」、小説という概念のないカメロイド星に赴任した男の悲喜劇「カメロイド文部省」、ニーチェの抱腹絶倒のパロディ「火星のツアラトウストラ」、時代小説として始まった物語が意外な展開となる「時越半四郎」などが収録されています。

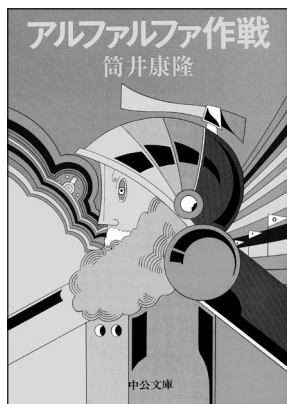
## ブラックな作品とジュブナイルの両立

この頃から筒井康隆の単行本ペースは加速していきます。一九六八年には『アフリカの爆弾』『アルファルファ作戦』『にぎやかな未来』『幻想の未来・アフリカの血』と、四冊もの中短編集が刊行されています。このうち『にぎやかな未来』は「NUL」や「科学朝日」に発表されたものを中心とするショートショート集です。前に触れていなかった作品としては、「星は生きている」「腸はどこへいった」「ベルト・ウエーの女」「亭主調理法」などが意外性とブラックユーモア満載の傑作です。

『アフリカの爆弾』の表題作（『オール讀物』一九六八年三月号）が、二度目の直木賞候補となりました。これも「疑似イベント」路線の作品と言っていると思います。物語の背景はアフリカの内戦と抑止力としての核装備です。小さな部落が独立して出来たアフリカの小国に、社命によって長年滞在してきたセールスマンの「私」は、いつのまにか経済顧問として酋長しやうちやうの相談役にされています。この国は観光をほぼ唯一の収入源としているのですが、アメリカから大所帯の観光団がやってきたことからドタバタ騒ぎが始まります。一度目の直木賞候補作「ベトナム観光公社」と似たタッチの作品で、幕切れの余韻が印象的なのですが、今回も受賞は果たせませんでした。この回は受賞作なしで終わっています。

『アフリカの爆弾』には、人生に失敗し万策尽き果てた末、旅に出た主人公が、ライメナ九番星の寒村に降り立ち、奇怪な異文化体験をする、カフカと宮沢賢治を掛け合わせたようなテイストの「ヒストレスヴィラからの脱出」、国際スパイだらけになった東京が舞台の「東京諜報地図」、顔テレ（テレビ電話）によって決定的に変わってしまう社会を描く「露出症文明」、ツイストの効いたジョン・ル・カレのパロディ「寒い星から帰ってこないスパイ」、外で何事が起ころうとも、家の中は安全で幸福、と思いきや……あまりにもグロテスクでショッキングな結末が待ち受ける「窓の外の戦争」など、どちらかといえば中間小説色の強い短編が収録されています。

相次いで出された『アルファルファ作戦』の方は「SFマガジン」掲載作が中心になっています。NHKを槍玉に上げた「公共伏魔殿<sup>ふくまでん</sup>」、この時点で老人問題を取り上げた「アルファルファ作戦」、この時点で人口問題を取り上げた「人口九千九百億」、この時点で痴漢冤罪<sup>えんざい</sup>を取り上げた「懲戒の部屋」、これも筒井康隆にとって重要なサブジャンルになっていくメタ歴史もの「慶安大変記<sup>けいあん</sup>」、そして「色眼鏡の



『アルファルファ作戦』（中公文庫、2016）  
表題作ほか「公共伏魔殿」「人口九千九百億」など、  
「SFマガジン」掲載作を中心に収録した短編集。

「狂詩曲」は、アメリカの十七歳の少年から「筒井康隆」に小説の原稿が届く。「世界各国語に通曉しているのだが、ただひとつ英語だけは苦手」な彼は（ちなみにこの名台詞を筒井康隆はエッセイでも使っています）友人の翻訳家に和訳を頼む。するとそこに描かれていたのは第二次日中戦争なのだが、両国に対する偏見があまりに酷くて、おかしなことになっていた……という、明らかにフィリップ・K・ディックの『高い城の男』の向こうを張った作品です。

この頃から筒井康隆は、以前にも増してアクチュアルな事象を積極的に作品の題材にするようになっていきます。戦後の高度経済成長期も安定期を迎え、経済的発展と共にさまざまな社会問題が次々と表面化しつつありました。しかし筒井康隆のアプローチは、たとえ一見、社会風刺、社会批判の様相を色濃く帯びていたとしても、けっしてただそれだけを目的に書かれているわけではありません。そこには常に、物語としての、小説としての趣向や企みが隠されています。この時期の短編を現時点から読み直してみることが、時代の変化によって古びることのない衝撃度と耐久性を確かめることが出来るでしょう。

少し話が前後しますが、このように複数の雑誌にエッジの効いた作品を続々と発表していきながら、並行して筒井康隆は十代向けの学習雑誌にも小説を発表するようになっていきました。その最初の傑作が、一九六五年から六六年にかけて「中三コース」と「高一コー



ス」に同時連載された『時をかける少女』です。言うまでもなく、日本のジュブナイルSF、ヤングアダルトSFの金字塔と言われる名作中の名作であり、一九八三年、大林宣彦監督、原田知世主演<sup>はらだ ともよ</sup>によって映画化、二〇〇六年には細田守<sup>ほそだ まもる</sup>監督によって劇場アニメ化されるなど、筒井康隆の数ある作品の中でも一際、人口に膾炙<sup>かいしや</sup>した傑作です。この作品が六〇年代半ばにすでに書かれていた。まさに「時をかける」小説と言つていいと思います。

ヒロインは中学三年生の少女・芳山和子<sup>よしやまかずこ</sup>。彼女はある日、学校の理科実験室でラベンダーの香りをかいで気を失う。それから彼女の周囲で奇妙な出来事が起こり始める。同じ一日が繰り返されていることに気づいた和子は、自分がタイム・リープの能力を得ていることを知る。そして彼女は、同級生の深町一夫<sup>ふかまちかずお</sup>から、彼が西暦二六六〇年からやってきた未来人であることを告げられる。そして……というストーリーは、時間旅行SFとしても今や古典であり、その後、同様のテーマに挑戦した作家たちに絶大な影響を与えています。

筒井康隆は、この時期に『時をかける少女』以外にも、「高二コース」に「悪夢の真相」、「中三コース」に「闇につ



『時をかける少女〈新装版〉』（角川文庫、2006）  
傑作と名高いジュブナイルSFの表題作ほか、「悪夢の真相」「果てしなき多元宇宙」を収録した短編集。

げる声」、「高一コース」に「超能力・ア・ゴーゴー」、漫画雑誌「少年サンデー」に連載された長編「緑魔の町」など、中高生向けのSFを数々発表しています。これは筒井康隆だけのことではなく、眉村卓の「なぞの転校生」や「ねらわれた学園」、光瀬龍の「夕ばえ作戦」など、第一線のSF作家たちが挙ってジュブナイルを手掛けていました。

『幻想の未来・アフリカの血』は、先に触れた本格SF中編「幻想の未来」に、デビュー作の一編「模倣空間」や「衛星一号」「姉弟」といった初期ショートショートや、ナンセンス極まる残酷譚「ふたりの印度人」、そして「アフリカの爆弾」のラストや後の長編『おれの血は他人の血』とも繋がる、意味不明で制御不能な「怒り」と「暴力」を核に据えた「アフリカの血」などを加えた、やや変則的な作品集です。

### 「SFマガジン」との亀裂

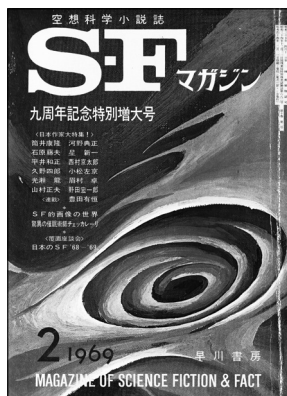
一九六八年末に発売された「SFマガジン」に「覆面座談会 日本のSF'68〜'69」という記事が掲載されました。これは当時の編集長だった福島正実ふくしまさみ、副編集長の森優もりゆうなど、何人かの同誌関係者が名前を隠して当時の人気SF作家たちの作品を取り上げて痛烈な批判を述べる内容でした。筒井康隆も俎上そじょうに載せられ、SF以外の小説誌に進出して人気を得た

ことを押揄おしゆされています。

この覆面座談会には、筒井康隆のみならず、星新一、小松左京、眉村卓、光瀬龍、豊田とよたありつね、有恒ありつね、平井和正ひらいかずまさなどが槍玉に挙げられており、いずれも歯に衣着せぬ舌鋒ぜつぽうで滅多斬りされていきました。当然ながらこの企画は当の作家たちから反撥はんぱつを呼び、揉めに揉めたあげく、最終的に福島正実が「SFマガジン」編集長を辞し、版元の早川書房も退社するという結末を迎えます。これが日本のSF史に大きな傷跡を残した「覆面座談会事件」です。

覆面座談会は、これ以前に推理小説の方でも行なわれており、雑誌の趣向として流行っていたのだと思います。後に宝島社刊行のムック「このミステリーがすごい！」の名物企画となり、こちらも物議かちを醸すことになります。

筒井康隆と福島正実の関係は、この事件によって一挙に悪化し、福島は一九七六年に亡くなってしまおうのですが、最後まで関係は改善しなかったと言われています。日本SFの黎明期れいめいにおける最大の功労者と言ってよい福島は、自らが育てた作家たちの多くから絶交されたままその生涯を終えました。「SFの鬼」と呼ばれたほどSFへの愛が強か



「SF マガジン 1969年2月号」(早川書房、1968)  
日本のSF史に傷跡を残した覆面座談会「日本のSF '68~'69」が掲載された。

った彼にとってみれば、せっかくSFでデビューした才能ある小説家たちが次々と中間小説誌に取られてしまうのが我慢ならなかったのかもしれない。

このことがきっかけになって、筒井康隆は「SFマガジン」への作品発表をやや控えるようになります。もちろん所要所で短編を載せてもいるのですが、作家としての主戦場は完全に中間小説誌になっていきます。福島正実の意図は逆効果だったわけです。しかしそれでも、他では出来ないような実験的な試みの可能な場所として「SFマガジン」は筒井康隆にとって貴重な媒体でした。結果として、これ以後に「SFマガジン」に掲載される作品は、むしろ以前よりもラジカルになっていきます。その最たるものが、長編小説『脱走と追跡のサンバ』であるわけですが、まだそこには辿り着けていません。

### 作家としての幅を広げる

一九六八年の秋から冬にかけて、筒井康隆は初めて週刊誌での小説連載を行ないました。「週刊文春」掲載の『筒井順慶』です。筒井順慶じゅんけいは実在した戦国時代の武将ですが、本能寺の変の際にどっちつかずの日和見ひよみを決め込んだことで知られています。この小説の語り手である「おれ」こと「筒井康隆」は順慶の子孫だと自称し（実は真つ赤な嘘なのですが）、その

行状を調べていく過程自体がスラップスティックな物語になっていきます。筒井流メタ歴史小説、変格歴史小説の秀作です。

一九六九年に入ると、筒井康隆は『筒井順慶』に続いて雑誌「PLAYBOY」で長編『靈長類 南へ』を連載します。これはいわば「東海道戦争」を地球レベルにまで拡大して語り直したのですが、主眼となっていてのは、核戦争による人類の絶滅です。映画的と言ってもいいような短い場面転換を積み重ねていきながら（幾つかの章は独立した短編として発表されました）愚かで野蛮な「靈長類」が終末へひた走りに向かっていく様子をスピーディーに描いています。

『筒井順慶』と『靈長類 南へ』という二長編が連続して刊行された一九六九年には、『ホンキイ・トンク』『わが良き狼』『心裡学・社怪学』の三冊の短編集が出ています。まず『ホンキイ・トンク』の収録作を見ると、表題作の「ホンキイ・トンク」とは、ここでは調律の狂ったカントリーソングのことですが、主人公の二流のコンピューター技師は、バカシアという小さなカジノ国家にコ



『筒井康隆コレクションII 霊長類 南へ』（出版芸術社、2015）  
日下三蔵編による選集シリーズ第2巻。表題作ほか、「脱走と追跡のサンバ」などを収録。

ンピューターの導入のため出かけていき、思いも寄らぬ目に遭います。その他、仇討あだうちが大イベント化してゆく「ワイド仇討」、グロテスクな超長寿社会の描写が光る「断末魔酔狂地獄」、文字通り「私小説」と呼ばれる文学上の潮流のパロディ「小説「私小説」」、六歌仙の話がタイムトラベルSFに変貌へんぼうする「雨乞い小町」、そして任侠小説にんきやうのパスティーシュかと思いきや、恐ろしくも哀しい結末が待ち受ける「ぐれ健が戻った」などが収録されています。

『わが良き狼』には、西部劇のヒーローだった「キッド」が二十年ぶりに町へと帰還する、それだけの年を取った人々が彼を迎えるが、彼は一日限りで再び町を去るつもりでいる、彼は二十年前に敵役だった「狼ウルフ」が今も町に居ることを知る……なんとも哀切なノスタルジーに満ちた表題作の他、北朝鮮がテーマの「疑似イベントもの」の「地獄だんまつ日本海因果まさいけのくろしほ」、風刺色の濃い「わが愛の税務署」「夜の政治と経済」、やる気満々の新入社員が垣間見る会社の恥部「若衆胸算用」などが収録、比較的（あくまでも比較的ですが）リアルな設定の作品が多いです。

『心理学・社怪学』は、心理学篇が「条件反射」「ナルシズム」「フラストレーション」「優越感」「サディズム」「エディプス・コンプレックス」「催眠暗示」、社怪学篇が「ゲゼル

シャフト」「ゲマインシャフト」「原始共产制」「議会制民主主義」「マス・コミュニケーション」「近代都市」「未来都市」と、二つの学問から用語を引っばって短編小説に仕立てています。後でも触れますが、筒井康隆には一種の「キーワード・フェチ」のようなところがあり（それ以前に「言葉フェチ」なのですが）、その性癖が遺憾なく発揮されたコンセプトチュアルな連作短編集です。

単行本収録作ではありませんが、一九六九年一月には「晋金太郎」という短編を発表しています（『推理界』）。これは前年の六八年に起きた金嬉老事件（在日韓国人二世の通称金嬉老が、静岡県清水市のクラブで借金トラブルから暴力団員二名を射殺し、そのまま又峽温泉の旅館で従業員や宿泊客十三名を人質に立てこもった事件。金は人質解放の条件として在日韓国人差別への謝罪を主張し、その模様がテレビ・ラジオで実況中継されることによって日本全国の話題を攫った。いわゆる「劇場型犯罪」の最初のケースとされることが多い）を題材としています。

ほぼ同時期に「新宿祭」という短編がありますが（別冊小説現代）、こちらはやはり一九六八年に新左翼が起こした暴動事件「新宿騒乱事件」を背景として書かれています。後で触れる「革命のふたつの夜」も同じ事件を題材にしています。また、この出来事については、筒井康隆は「90年安保の全学連」という漫画も発表しています。小松左京も学生時代にモ

リ・ミノル名義で漫画を描いていたことが有名ですが、筒井康隆も時々思い出したように漫画作品を発表しており、後に『筒井康隆漫画全集』も編まれています。「90年安保の全学連」も同書の冒頭に収められています。七〇年安保をめぐって学生運動が最高潮に盛り上がった時代には九〇年安保を想像して描いているあたりが、いかにも筒井康隆らしいと思います。

一九七〇年は『革命のふたつの夜』（旧題『母子像』）と『馬は土曜に蒼ざめる』（文庫化された際に『馬は土曜に蒼ざめる』と『国境線は遠かった』に分冊されました）の二冊の短編集が編まれています。前者には、白いサルの玩具が妻と赤児あかこを異界に引きずり込む、筒井流ホラー短編の嚆矢こうしというべき「母子像」、バッドエンドのサイコスリラー「くさり」、大学教授の家に学生運動の闘士である女子学生が助けを求めてやってきて、そこから未来が二通りに分岐する「革命のふたつの夜」、異常に動揺しながら校長先生が女子高生たちに語り続ける爆笑必至の「泣き語り性教育」、カミュの「ペスト」の身も蓋ふたもないパロディ「コレラ」などが収録されています。

『馬は土曜に蒼ざめる』には、カフカの「変身」よろしく「眼が覚めたら、とにかく馬になつていた」と始まる表題作に、後光を負って生まれてきた我が子おもんばかを慮る父親の葛藤を描



いた「息子は神様」、学生運動の暴力沙汰が連鎖反応的にエスカレートしてゆく「逃げろや逃げろ」、全編対話のみで名大工の生きざまを飄々と語る「横車の大八」、「タイム・マシンを発明した」と言つては延々と爆笑する、ただそれだけの「笑うな」、赤坂のバビロニア・マンションのレストランでしのぶちゃんことヌートリア王国の第六王妃と出会った「おれ」は、彼女と寝ようとしてヌートリア王に見つかつてしまう、彼女の部屋の衣装ダンスは、時空のねじれでヌートリアに通じていたのだ、逃げる「おれ」を捕まえようと、王はマンションをどんどん買つていき（＝ヌートリアの国境が拡大し）、その結果、空間が歪んでゆく、という「国境線は遠かつた」、タクシー運転手が関西弁で内的独白を続けるうちに最悪の事態を迎える「夜を走る」、運転手を含むバスの乗員乗客全員がひとりの男の集合人格であるという「欠陥バスの突撃」、架空の引用コラーージュでビタミンをめぐる奇想とドタバタが綴られる「ビタミン」、そして全編対話によるナンセンスの極み「フル・ネルソン」などが収録されています。

ここで星雲賞について述べておきましょう。筒井康隆は「NULL」を自ら立ち上げたことからわかるように、SFという新しい小説のジャンルに深い愛情を注ぎ、日本におけるSFの勃興期からその認知と発展に多大なる貢献を果たしてきた作家です。彼は日本

SF作家クラブの三代目事務局長と四代目会長を歴任しています。SFというジャンルは、初期から現在に至るまで、作家や翻訳家、編集者たちとファンとの距離が極めて近いことが特徴で、SFを愛する者たちが一堂に会する催しとして日本SF大会という合宿形式のコンベンションが行なわれています。星雲賞は、前の年に発表された広義のSF作品の中から、SF大会の参加者が一票を投じることによって選ばれる賞です。一九七〇年度の第一回星雲賞は、長編部門を『霊長類南へ』で、短編部門を「フル・ネルソン」で、筒井康隆が両部門を制覇しています。どちらも純然たるSFとはいささか異なるテイストを持っています。筒井康隆という作家は、かくもSFファンから愛される存在だということです（これはまたSF読者の許容範囲の広さを物語るものとも言えます。第二回星雲賞の短編部門も、筒井康隆は「ピタミン」で受賞、その後も何度か受賞しています）。

### 三島由紀夫との対照

一九七〇年に起きた大きな事件として、十一月二十五日の三島由紀夫の割腹自殺があります。三島の死について、筒井康隆は一九七〇年十二月十三日号の「朝日ジャーナル」に「いたかつただらうな」というタイトルの追悼文ついでと言ってよいエッセイを書いています。

「あれから一週間、まだ衝撃の整理がつかないでいる」と、この文章は始まっています。三島の自殺を知った時、筒井康隆は「いたかつただらうな」と旧かなづかいで感じたといえます。このエッセイの内容はしごく真摯しんしなもので、もちろん現実の人の死にかかわるものですから当然のことかもしれませんが、この頃には次から次へと社会的な事象を取り上げては大胆不敵に笑い嗤いのめしていた筒井康隆が、こと実際の敬愛する先輩作家の死にかんしては、かくも誠実な一文を書いていたということには、深い感慨を抱かざるを得ません。この文章は、筒井康隆という作家のキャラクターを推し量る意味で、とても重要だと思います。

筒井康隆は自分の小説世界に対して常にメタの次元を有している作家です。だから登場人物の倫理観や行動原理を作者自身のものだと思ってしまうと、筒井康隆という人物の本質を大きく歪めた形でしか受け止めることが出来なくなってしまうます。もちろん、そういう要素も内に持っているからこそ彼はそのような小説が書けるのですが、しかし一般的な倫理観や正義感、常識と呼ばれるような事どもをあっさりと踏み越えてみせる作品のあり方を、本人がそのまま信じているわけではないということは、読み違えてはならない点だと思えます。このことが、三島の死を淡々と受け止めたこのエッセイを読むとよくわか

ります。

一九七一年にはあちこちに書き散らしたコラムやエッセイ、ショートショートや短編などを集めた『発作的作品集』と、短編集『日本列島七曲り』が出ます。後者の表題作では、左翼学生が旅客機をハイジャックするが、誰も真面目に受け取らず、事態はどんどん支離滅裂になっていきます。無茶苦茶な展開の「桃太郎輪廻」、オナニーによるテレポーテーションすなわちオナポートがアイデアの中枢に置かれた「郵性省」、童貞と処女で結婚した結果、性的欲求と抑圧が作用して至るところに潜望鏡が見えてしまう「奇ッ怪陋劣潜望鏡」、風呂の栓を抜いて鞆丸（とうがん）を吸い込ませて楽しんでいたら抜けなくなる「陰悩録」、土地問題のこじれで二軒の家が融合し、お互いを無視して暮らしていたが、最後は乱交パーティーになってしまう「融合家族」など、エロチックな、という言い方が上品過ぎるのであれば淫（いん）猥（わい）な内容の作品が多いことが特徴です。

この年、筒井康隆は書き下ろし童話『三丁目が戦争です』も発表しています。タイトルの通り、すぐ近くの「三丁目」で起こる戦争を描いた「疑似イベントもの」で、筆者を含む当時の子どもたちに広く読まれて少なからぬトラウマを与えました。

前期筒井小説の重要な傾向のひとつである「疑似イベント」は、マスメディアの爛熟と、

冷戦構造、その具体的な現れとしてのベトナム戦争を、主な発想源にしていたと言えます。当時の日本人にとって、ベトナム戦争はかなり奇妙なものに見えていたと思います。三十年前の戦争で日本に勝ったアメリカが、ふたたび別の国と戦争をしている。今でも一般的にはあまり変わらないのかもしれませんが、ベトナムという国は、同じアジアとはいえ距離が離れていることもあってあまり馴染みがなく、そのことが却かえってさまざまな想像力を発動させることになったのだと思われれます。日本社会では、得体の知れない小さな国と大国アメリカが長期にわたって戦争をしていて、どうやら泥沼の状況に陥っている……というイメージだけが流布していました。ここではないどこかで今も続いている戦争というイメージが裏返って、理由もわからぬままここで突然起こる戦争という発想を導き出したのだと考えられます。

一九三四年生まれの筒井康隆は徴兵はされませんでした、終戦時には少年だったのでから戦争の記憶は生々しく持っている筈はずです。日本文学における代表的な戦争文学としては大岡昇平の『俘虜記』や『野火』、大西三人の『神聖喜劇』、島尾敏雄の諸作などが挙げられるところですが、従軍経験者の彼らが



『三丁目が戦争です』(洋泉社、2004)  
童話作品。1971年、講談社刊の新装版。講談社青い鳥文庫版(2003)も刊行されている。

見たものと筒井康隆の戦争観は当然違ってきます。いわば「終わった戦争」と「忍び寄る次の戦争」に挟み撃ちされているような感覚を、筒井康隆の世代は抱いていたのではないかと思います。冷戦下における漠とした不安、ベトナム戦争に対する好奇と恐怖が緋い交ぜになったような感覚が、筒井康隆の「戦争もの」からは強く感じられます。

筒井康隆という作家は、そのキャリアにおいて最も忙しい時期に突入していました。しかしこの頃秘かに、SF専門誌でも中間小説誌でもない、純文学の雑誌、いわゆる文芸誌への進出も果たしています。当時中央公論社が刊行していた月刊誌「海」の一九七一年六月号に掲載された「家」です。この小説は、同時期に書かれた軽快で軽妙な作品群とは感触がまったく異なっています。水上に浮かぶ一軒の家が無限とも思える不気味な空間と化してゆく、何よりも言葉の力によって変容してゆく、というもので、七〇年代末から本格的に始まる「文学への越境」の先鞭をつける力作です。「家」は一九七二年の短編集『将軍が目醒めた時』に収録されることとなります。

## 小説の時代

筒井康隆は、誰もが認める流行作家になっていました。あまりに忙し過ぎて、そのこと

自体が何らかの形で小説に入れ込まれている作品も少なくありません。しかし上には上がいたのです。そのことがわかる長編エッセイがあります。「小説現代」に六九年から七〇年にかけて連載された、その名も「あなたも流行作家になれる」です。

冒頭に「はじめに、おことわりしておきたい。ぼくは自分のことを、流行作家なんかじゃないと思っている」と書かれています。何をけんぜんご謙遜を、と思うわけですが、続く第一講では、日本においては「量産する作家」こそが「流行作家」なのだと言明した上で、こう続けます。「中間小説誌なるものが日本にはあり、これに載る短編数が作家の量産度の一つのメージャーになる」。そして実際に、一九六九年四月から九月までに中間小説誌に掲載された小説を作家別にカウントし、月平均本数を算出して、上位者をリストにしてみせているのです。

これによると、第一位は梶山季之かじやまとしゆきで月平均3・5本。それから佐賀潜さがせんという今はほとんど忘れられてしまったミステリ作家が第二位で3・3、以下、黒岩重吾くろいわじゆうご3・0、川上宗薫かわかみそうくん2・6、野坂昭如2・5と続き、筒井康隆は月平均1・1で第三十四位だということです。1・1でも毎月一本以上短編を書いているわけですが、もっと量産していた作家が三十人以上いたということなのです。

このことから言えることは、まず第一に、いかにこの頃が「小説の時代」だったかという事です。小説の雑誌、中間小説誌が多数存在し（そのほとんどが今でもありますが、すぐ述べるようにその役割はかなり変わっています）、人気作家たちは毎月複数の雑誌にまたがってしのぎを削っていました。作家の数が今ほど多くはなかったという条件もあるかもしれませんが、それにしても梶山季之の二ヶ月で七本というのは大変な数字です。

それからもう一点は「短編の時代」だったということです。現在の小説誌のほとんどは、人気作家であればあるほど、長編連載が中心となっています。単行本化を前提にしている、本になってはじめて出版社としては利益を出すことが出来るからです。逆に言えば今は短編集が比較的出しにくくなっています（連作短編集やテーマ・アンソロジーのような体裁はよくありますが）。しかしこの頃は、まだ雑誌自体が現在よりはるかに売れていたということもあります。まずし、月平均1・1の筒井康隆も、すでに見てきたように短編集を連発しています。

ところで、このリストに挙げられた、筒井康隆より上位にいた流行作家たちのほとんどは、今では鬼籍せきに入っているか、忘れられています。しかし筒井康隆の短編の多くは、今読んでもその面白さが薄れていません。それはこの頃に書かれた作品が幾つもの、その後、数々のアンソロジーに収められて新たな読者を獲得していったことでも明らかです。短編



作家・筒井康隆の驚異的な打率の高さこそ、彼がその後の長きにわたって現役であり続けていることの理由でもあるでしょう。

「流行作家」筒井康隆は、小説以外の文筆も旺盛に発表していきます。「あなたも流行作家になれる」の連載が終わると、すぐに『乱調文学大辞典』という文学辞典のパロディの連載を行ないます（刊行は一九七二年）。これは題名通り「あ」から「ん」までの文学にかかわる単語や固有名詞を勝手に定義した辞典で、たとえば「愛読者」の項は「自分の読者を愛すること。転じて、「あなたの作品を愛読しています」といって作家の家にやってきた女子高校生を誘惑すること。愛讀者というのは、オナニーの好きな一部の作家のこと」とあり、「アンチ・ロマン」の項は「反小説。既成の小説を否定した小説。その理想とするところは、当然読者がひとりもないことであろう」とあり、「カフカ」の項は「作家。生存の不条理に苦しみ、一生成のまわりをぐるぐるまわっていた。ある朝眼がさめると巨大な虫になっていて、罪なくして殺された。彼は男でありながら、安部公房、倉橋由美子などという人たちを生んだといわれているが、これはおそらく何かの間違いであろう」とあり、「筒井康隆」の項は「捕乳類霊嘔目。学名スラップステイクス・パラドックス。小説科下等SF種に属し、青山附近の地下に好んで巣を作る」とあります。今となつては死語に近いもの

もありますが、拾い読みするだけでも笑いがこみあげてくる、筒井康隆にしか書けない「文学辞典」です。

一冊の「辞典」をひとりの作家が全部書くという試みを、しかも連載という形態でやってのけたのは、おそらく前代未聞だったのではないかと思えます。しかし筒井康隆は、この後も同種の試みを何度も行なっています。それらについては次章以降で触れます。

### 「私小説」のミュータント

さて、第一章もようやく終わりに差し掛かりました。一九七〇年十月から一九七一年九月まで、筒井康隆は「SFマガジン」に『脱走と追跡のサンバ』を連載します。この長編は、疑いもなく、この時点での筒井康隆の最高傑作であり、日本SFによる海外の「ニューウェーブSF」への最良の返答です。しかしこの小説は、J・G・バラードに代表されるような「ニューウェーブSF」とはかなり感触が異なっています。『ホンキイ・トック』に「小説「私小説」という短編が入っていました



『乱調文学大辞典』（角川文庫、1986）  
筒井による単語や固有名詞のユーモア溢れる  
定義が連ねられた文学辞典。

が、ある意味でこの作品は、日本文学における「私小説」的なもの、すなわち作者自身の人生や生活を描くという文学形式を、SFという変成装置を使ってミュータント化したような小説だと筆者には思えます。

「疲れている。ひと晩中自分のいびきで眠れなかった」というすこぶる印象的な書き出しから、この小説は始まります。語り手で主人公の「おれ」はSF作家です。彼は目覚めてすぐに、世界の異変に気づきます。少し長めに引用します。

自由でないのは金だけで、他はすべて自由だったあの時代の「あそこ」にいたおれ。他はすべて自由であっても、金だけは不自由だったために、金の自由のためには他の自由を犠牲にしてもいいなどというたわけたことさえ考えていたあの時代の、「あそこ」にいたおれ。情報による呪縛、時間による束縛、空間による圧迫、そんなものとは縁がなく、軽やかに泥水はねとばし、すがすがしく煤煙を呼吸し、馬鹿空と腐れ大地の間を飛翔していたあの時代の、「あそこ」にいたおれはいったいどこへ行ってしまったのだろうか。

あきらかに、現在おれのいる場所は、以前おれがいた場所ではなく、現在おれと

共に流れ続けているこの時間は、以前のおれが身をゆだねていたあの時間とはどこかで隔絶された別の時間なのだ。つまりここは、おれが以前いたところではない世界である。それは、はっきりしている。しかしそれが、別の天体なのか、別の宇宙なのか、別の次元なのか、未だに判然としないのである。

（『脱走と追跡のサンバ』）

こうして「おれ」は、「現在おれのいる場所」から「以前おれがいた」という「あそこ」への「脱走」を試みることとなります。右の引用にある「情報」と「時間」と「空間（内宇宙）」が、それぞれの章題となっています。「おれ」が陥っている状況は、作者である筒井康隆自身の境遇を、どうしたって想起させずにいません。ふと気づいてみたら、時代の寵児たる「流行作家」のひとりとして持て囃され、それがゆえにメ切その他によって忙殺されておき、確かに経済的には格段に豊かになったかもしれないが、SF／小説への夢と希望に胸ときめかせうち震えていたかつての自分は、ほんとうにこのような状態を望んでいたのだろうか、という疑問と焦燥。この作品は、そんな筒井康隆の複雑な内面の葛藤を、作家としてデビューしてからのおよそ十年の間に蓄えたためくるめく思弁と華麗なる小説技術を駆使して描いていくものだと言えます。

「おれ」の「脱走」に対して、やがて「尾行者」と呼ばれる私立探偵がつきまとい始めます。題名のもうひとつのキーワードである「追跡」はここから来ています。しかしこの「尾行者」はある意味で「おれ」の分身でもあることがわかってきて、「脱走」と「追跡」が一種の鏡像関係にあるらしいことが露あらわになっていきます。「正子」というヒロインの存在も謎めています。「おれ」の恋人なのか妻なのかもはっきりしないのですが、実は彼女こそが自分を「あそこ」から「この世界」に連れてきたのではないかと「おれ」は疑っています。正子こそ全ての黒幕なのではないか、というわけです。

しかしこの小説の底知れぬ魅力は、このようにあらすじめいたことを記してみても何も伝わりません。読みどころは、構成も辻褄も無視してひたすらに繰り広げられる荒唐無稽な挿話の数々と、「おれ」のみならず出てくる人物全員が発するいつ終わるとも知れない言葉の奔流にあります。いわば「脱走と追跡のサンバ」は「脱線と饒じょうぜつ舌のサンバ」でもあるのです。筒井康隆は、この作品に持てるアイデアとテクニクのすべてを惜しみなく注ぎ込みました。その結果、日本SF史に永久に残り続ける野心的かつ画期的な作品が誕生したのです。

と同時に、明らかにこの小説は「一九七〇年代初頭の筒井康隆」のインナー・ドキュメ

ントでもあります。「私小説」とは、そういう意味です。驚愕と爆笑の連続、ナンセンスとスラップスティックの極限でありながら、この作品の底には奇妙なセンチメントと諦念のような空気が流れています。これを「文学的」な香気と言ってもいいと思います。

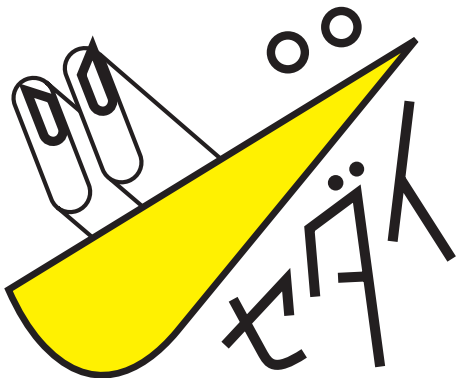
前に『乱調文学大辞典』の「カフカ」の項を引用しましたが、そこでは安部公房と倉橋由美子の名前が挙げられていました。時期的にみると、安部公房の『燃えつきた地図』（一九六七年）や倉橋由美子の『暗い旅』（一九六一年）『スミヤキストQの冒険』（一九六九年）の向こうを張ったという見方も出来ます。また、連載開始の前年に邦訳の出ていたサミュエル・ベケットの小説『モロイ』からの影響を見て取ることも出来るかもしれません。

ところで、この『脱走と追跡のサンバ』には「続編」があります。それは、ちょうど十年後に書かれることになる『虚人たち』（一九八一年）です。しかしそれは通常言われるような意味での「続編」とは大いに違っています。どう違うのかは、第三章でお話することにします。

『脱走と追跡のサンバ』と同じ一九七一年に、筒井康隆はジュニア向けのSF入門書『SF教室』を出しています。日本のSFの歴史と作家作品紹介を筒井康隆が執筆し、海外SFの章を翻訳家の伊藤典夫いとうのりおが、映像や漫画などを豊田有恒が担当しています。この本は青

少年のみならず大人のSFファンからも好評をもって迎えられ、SF入門書のスタンダードとして高く評価されています。筒井康隆はSFへの愛を保ちながら、他のジャンルへの快進撃を続けていきます。

君は、



何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**